

意味がわかると怖い3分間ノンストップショートストーリー

ラストで君は ゾクとする

PHP研究所／編
タカ
TAKA／イラスト




目次

- | | | | |
|----|--|------------------|-----|
| 1 | しょうめい写真 ^{しやしん} | ますだこうじ
榎田耕司 | 005 |
| 2 | お姉ちゃんの居場所 ^{ねえ いばしょ} | もとみやしゅうた
本宮笙太 | 015 |
| 3 | ゾンビ狩り ^が | あがた
緒方あきら | 021 |
| 4 | 幽霊の出る家 ^{ゆうれい できえ} | くれ
呉 はるか | 033 |
| 5 | 人魚は転校生じゃない ^{にんぎょ てんこうせい} | しき
式さん | 047 |
| 6 | 家事代行シッターのサニーさん ^{かじだいこう} | うちだちえ | 059 |
| 7 | 君が贈る花 ^{きみ おく はな} | しき
式さん | 071 |
| 8 | たった一日 ^{いちにち} | うみかげなりき
海影成輝 | 085 |
| 9 | 星の砂時計。 ^{ほし すなどけい} | ゆづきみさ
雪月海桜 | 097 |
| 10 | 箱 ^{はこ} | コマイトシヒコ | 111 |
| 11 | もどる | ヒロモトリヨウ | 125 |
| 12 | 君は何回時間を巻き戻したの？ ^{きみ なんかいじかん まもど} | しき
式さん | 129 |
| 13 | ふしぎな窓 ^{まど} | いづみカホル | 141 |
| 14 | めいぐるみ供養 ^{くよう} | いとうりつか
伊東律花 | 151 |
| 15 | 幸福デパート ^{こうふく} | はなその
花園メアリー | 163 |
| 16 | 一つ目の願い ^{ひとめ わが} | しき
式さん | 175 |
| 17 | 落としもの ^{おとしもの} | よみ
黄泉 | 183 |



しょうめい^{しゃしん}写真

ますだこうじ
榎田耕司



僕は三日間、自転車をこぎ続けた。

高校受験から逃れるために、家を出したわけじゃない。夏休みの思い出作りでもない。

漫画の主人公のように猛特訓をして、競輪選手を目指すわけじゃない。バスと電車がもつた

いなかつたからでもない。

共働きの両親には、学習塾の夏季合宿と嘘をついた。

お金はなんとでもなる。お小遣いは、月に三万円だ。友人たちには、うらやましがられるが、

塾での勉強時間を「労働」と考えたら、その対価としては足りないくらいだ。

努力が実れば勝ち組に入れるが、ちよつとでもミスすれば負け組になる。

遊びの誘惑を断ち切つて机にかじりついていても、報われるとは限らない。

どんなに考えても答えがわからず、六角形の鉛筆に掘つたサイコロの目に運命を託すことが増

えたのは、一年くらい前からだ。

成績は下降の一途をたどっている。このままでは難関私立高校に合格できない。才能の限界を

悟つた僕は、自分の人生を都市伝説に託そうと決めた。

人気のない公園で時間をつぶし、夜の一時半を回つたところで再び自転車にまたがった。目的

の店がある商店街までは、二十分ほどだ。

それなりに大きな町なのに、駅前は真つ暗だ。終電の時間は過ぎてている。人影もない。商店街の入り口に自転車をとめた。鍵はかけない。歩道と平行にする。いざという時すぐに逃げられるよう、電車ではなく、わざわざ自転車を使つて隣県からやつて来たのだ。このちよつとした行動が、明暗を分けるかもしれない。

錆びついたアーケードが、異世界へと続くトンネルのように、ぼつかりと口を開いている。

「ふうく、ふうく」

深呼吸をするが、足が震えて前に出ない。

「大丈夫だ。オバケなんて出るはずがない。すべては将来のためだ。覚悟を決める」

昼間に下見をしていなければ、ビビつて断念していたかもしれない。

月明かりがあつてもなお薄暗い寂れたアーケード街だ。「貸店舗」の貼り紙が墓標のように立

ち並ぶ商店街の一角に、噂の写真店がある。

なんとなくだけど、不気味なオーラを纏つている気がした。

写真を載せると呪われる。

真実を書くことはできない。

しかし、確実に存在する。

それがネット上に流れている都市伝説だ。

僕は一人で、危険地帯に足を踏み入れようとしている。

勇気があつたわけじゃない。友達がいらないわけじゃない。

一人でなければ、シャッターは開かないと、SNSでささやかれていたからだ。

真つ暗な商店街を歩く。

人の気配もなければ、車の音も聞こえない。

黄泉の国への入り口と言われても、納得してしまいそうな雰囲気がある。

ワオオオオオー！

犬の遠吠えが闇夜に響き渡つた。目が潤み、体が縮こまる。

「地獄の番犬……なわけ、ないよな」

両足の太腿を叩いて気合を入れる。足の震えがましになってから、一歩を踏み出した。結果はどうであれ、長居はしたくない。奥へ奥へと進んでいく。

「ここだな」

小さなつぶやきが、暗闇に溶けこんでいく。

ガシャ、ガシャ。

小刻みに動く手で、シャッターを叩く。

「しよ、めい、写真を撮ってください」

返事がない。もう一度叩いたが、耳に雑音が残ったただけだ。

怖い。怖すぎる。

心臓が破裂しそうだ。これ以上は耐えられない。

「ガセネタか……」

営業時間が深夜二時から三時という時点で、怪しい情報だと気づくべきだった。がっかりしたような安心したような、なんとも言えない気持ちで、ふうくと息を吐き出す。

背中を向けた瞬間に聞き慣れない音がした。

カツン、カツン。

何かが近づいてくる。

「だ、誰だ」

アーケード街には、人つ子一人いない。

カツン、カツン。

その音は背後から聞こえた。——店の、中だ。

逃げ出したのに、足が動かない。得体の知れない力に抑えこまれているかのようだ。夏だと
いうのに、なぜだか肌寒い。

ガラガラガラ。

シャッターが開いた。

「どうぞ」

白髪に髭を生やした老人が現れた。店主なのだろう。祖父のような優しい笑顔に誘われ、ド
アをくぐった。

店内は明るい。古風な写真スタジオだ。蜘蛛の巣もなければ、カビっぽい匂いもない。幽霊
とは縁遠い、整理整頓された部屋だ。

「う、噂を聞きました。特別な写真を撮ってくれるというのは、本当ですか？」

「当店では普通の証明写真のほかに——」

店主がゆつくりと瞬きをした。ゴクリと唾を飲みこむ。

「——命を削る消命写真がございます」

「そ、それです。命を削るつてやつで……」

噂は本当だった。もう後には引けない。

き
けつまつ
気になる結末は
ほんべん
本編でチェック!

3

ゾンビ狩り^が

おがた
緒方あきら

今日も朝起きて、朝飯を食べて、学校に行く。

俺、高原信也の日常は今までと変わらない。

ただひとつ違うのは、世界にゾンビがあふれていること。

「父さん、母さん、ミユ、おはよ！ 学校行ってくるね！」

リビングのイスに腰掛ける両親と遊びに来たままの彼女に告げて、俺は高校に行くため玄関に向かう。背後でうーうーと唸る声が聞こえたが、もう慣れっこだ。

ある日、突然現れた病原菌——通称ゾンビウイルス——はあつという間に世界中に拡がった。

多くの感染者を出し、数えきれないほどのゾンビが発生した。

ゾンビになった人間はただうーうーと唸ってそこから中を歩き回る。

俺の家族や彼女は、みんなゾンビになっってしまった。

けれど、昨年「ゾンビウイルス予防ワクチン」が発表されると、増加傾向にあったゾンビの数は横ばいになった。

すでに感染した人を治すことはできないが、ワクチンさえ打てば、ゾンビになることはない。

ゾンビ化せずに残っていた全人類がワクチンを打ち終えた今、ゾンビ化の危機は薄れている。

そして、人間とゾンビの奇妙な共同生活が始まった。

道を歩けばゾンビを見かける。たまに車にひかれていたり。

そんな光景を見ながら、学校へ向かうのだ。

映画やドラマで見ると、ゾンビが人間を襲って世界のピンチ……なんてことにはならなかった。人間は人間として生活を再建し、ゾンビはその社会でなんとなく野良犬のようにそこらへんにいる存在になった。

俺もゾンビになった両親や彼女とともに、なんとなく元の生活に戻っていった。

寂しくないと言えば嘘になる。だけど、彼らは今も家にいるんだし。割り切って考えるしか方法はなかった。俺はいつか見た漫画の主人公のようにはなれない。両親も恋人も救えない。そんな悲しみを胸に秘めながら今を生きている。

人間だった頃のみんなとの思い出は少しずつ薄れていき、ゾンビになった今の姿に塗り替えられていく。それだけは今でも受け入れがたく、つらかった。

綺麗に整えた思い出まで、落書きされていってしまうようで――。

「あ、この道ゾンビでいっぱいだ。回り道しなきゃ」

通学路の一角で、ゾンビの群れと遭遇した。

ゾンビは襲つてこないとはいえ、道をさえぎるほどに集まっているとさすがに気味が悪い。回り道をしようと思つて振り返ると、すぐ後ろにもゾンビが立っていた。

「う、うわあ！」

思わず尻もちをつく。目の前に皮膚がボロボロになったゾンビが立ち、唸り声をあげている。危険はない、大丈夫。そう思つても突然の事に足が震えて立ち上がれない。一歩、ゾンビが迫ってくる。その姿は座りこむ俺には物凄く大きく見えた。

「わあああ!!」

怖くなつて両手で顔をかばうようにした時、たくさんの足音が駆けてきた。

「君、危ないっ！」

男の声と共に、凄い音がしてゾンビの頭が破裂した。

振り返ると、群れていたゾンビに数人が襲いかかり頭をバットで破壊していた。

倒されたゾンビたちは地面に崩れ落ち身体をピクピクとさせて、次第に動かなくなっていく。

「危なかつたな、君。立てるかい？」

「あなたたちは、その、ゾンビハンター……？」

ゾンビハンター。ゾンビであふれたこの世界で、ゾンビを狩つてまわっている人たちの総称だ。

背の高いお兄さんは俺の片腕をつかんで立たせると、乱れた襟を直しながら言った。

「そうだ。日夜ゾンビを狩り続ける正義の集団、ゾンビハンター日本支部関東班だ！」

「でも、ゾンビは人間に無害じゃ……」

倒れたゾンビを見下ろして、俺がおずおずと言うとお兄さんは大きく首を振った。

「そんなことはない。ゾンビは人間にとって大変危険な存在だ！ いいかい、君も今襲われたように……」

「いや、あれは突然後ろにいて驚いただけで」

そう反論しても、お兄さんの語りは止まらない。

「君が襲われたように、ゾンビは人を襲う！ そして襲われた人間もゾンビになってしまう！」

「そんな！ ワクチンを打てば、ゾンビにはならないとテレビで見ました」

「それはゾンビを手に負えない国やマスコミが流した偽物の情報だ！ ゾンビに噛まれればゾンビになり、爪で引っ掛かれればウイルスに感染し……放っておくことのできない社会の悪だ！」

言葉に詰まり、俺は下を向いた。

俺を襲った、いや後ろにたまたまいたゾンビは頭をつぶされて動かなくなっている。

開かれた口から覗く汚れきった歯、力なく地面に投げ出された指先のどす黒い爪。

ゾンビを狩る抵抗感はずぐに消えた。何よりも、ゾンビをなぐつていると、道行く町のひとに感謝されるのだ。

お礼を言われると、自分が正しい行いをしたのだと胸がじんわり熱くなった。

ますますゾンビ狩りにのめりこんでいった俺は、学校でゾンビハンター部を作るとその部長に就任した。部員は、すぐに集まった。そして彼らは率先してゾンビ狩りを行う俺を口々に称賛した。

俺は学校の皆に褒め称えられ、一躍学校のヒーローになった。

「今度のゾンビ狩りだけど、駅前通りに多数のゾンビの目撃情報が——」

最近では部員たちも積極的にゾンビ狩りをするようになり、皆で結束を高めていった。

悪と戦う、心強い仲間たちだ。そして俺こそが、この素晴らしいチームを率いるリーダーなのだ。

「今度の連休、合宿とかしませんか？」

後輩の部長が言った。たちまち周囲が盛り上がる。

皆、使命感に燃えているのだ。

「それなら私、部長の家に行ってみたいです！」

き
気になる結末は
ほんぶん
本編でチェック!

● LIVE ●

速報 ゾンビウィルス無効化に成

はなし
すべてのお話に
さしえ
イラストする挿絵つき